

有機農業アドバイザーです① 福津農園／愛知県新城市 松沢政満

本会の活動を強化し、有機農業の一層の普及と、後継者や新規就農者の育成を図るため、2004年10月、18名の「有機農業アドバイザー」（次頁参照）を認定しました。今号から、その方たちの各地での活動内容や有機農業に対する想いを連載で紹介します。

「エネルギー生産業」という農業の原点に帰って 自然を先生に新時代の農を模索



2007年3月 全国大会 in 豊橋で福津農園を訪れた
現地見学の一行



外国の若き農業リーダーや農政官僚が研修や見学に訪れて
有機循環農業を学ぶ。前列右から3番目が筆者

「論より証拠」のモデル農場を目標に

25年前に脱サラし、Uターン帰農しました。食と農と環境への問題意識からひたすら有機農業に専心しました。山間の小農が自立でき、かつ急速に深刻度を増す地球環境の時代における社会的責任を果たせる営農をするために、従来の農業理論や有機農業の常識も再考するの必要を感じました。

「エネルギー生産業」という農業の原点に帰って、確たる視点を定めつつ、自然を先生に新時代の農を模索しました。

工業的な近代農業は、自然界の生物、物理、化学的多様性の影響を取り除く排除の理論に基づいており、これが地球環境を悪化させる大きな原因ともなり、破綻の危機を迎えています。その反省に立つ有機農業は、多様な生物との共存を原則とする。故に、多様な環境因子が複雑に影響しあいつつバランスを保つ動的平衡関係を前提とする共存の論理に基づく農法、技術の開発が不可欠です。頼りになる先行理論がない現状では、見事な動的平衡を具現している自然の摂理（叡智）に学ぶしかありません。

福津農園の特徴は不耕起直播の野菜づくり、野菜や果樹の混植。農園内は常に緑で満たし、太陽光エネルギーを最大限、農に活用する。バイオマスの総合的利活用、等です。つまり一枚の落ち葉のようなバイオマス（生物資源）が持っている、エネルギーをはじめとする物理、化学、栄養学的特性を徹底的に利活用する。バイオマスが土に還る過程こそが、生物多様性を代表とする良好な農的環境を具現する基となるからです。堆肥にするのとはもったいない。「落葉一枚の意識改革」が必要な時代です。

福津農園はこのような思いを込めた農業の「論より証拠」とし

てのモデル農場を目標としています。まだ個々の農法、技術は不完全で幼稚な域を出ていないが、それでも条件不利といわれる山間地での小さい家族農業を自立させ、楽しく豊かな百姓暮らしを支えてきました。未熟な理論や農法、技術であるにもかかわらず、最近では年間延べ1000人余の人が、食、憩、学、調等いろいろな目的で農園を訪れます。これが、気配りが行き渡る小さい有機循環農業が発揮する外部経済力の真髄です。

「日有研の有機農業アドバイザー」の名にふさわしい仕事ができるよう心がけたいと思います。

愛知県農業総合試験場のスタッフによる福津農園の水田土壌調査。この五年間プロジェクトはのちに農水省の有機農業総合支援対策の受託事業となる。

